

# 博士論文（要約）

論文題目      近代童話と宮沢賢治

氏      名      渋谷   百合絵

# 目次

序論——近代童話への批判と課題	7
-----------------	---

一 読み継がれる近代童話	7
二 《童話》研究の開花	8
三 戦後児童文学における《童話》	15
四 「童話伝統批判」および古田論の再考	19
五 本論の構成と概要	22

## 第一部 大正期童話の成立

第二章 小波お伽噺の成立——草双紙の影響をめぐって	33
---------------------------	----

一 小波お伽噺の出版	33
二 小波の後日譚もの	35
三 草双紙における後日譚もの・異類合戦もの	39
四 小波お伽噺の表現手法	42
五 小波お伽噺から童話へ	48

第二章 『赤い鳥』の文体改革——童話／綴方の相互交流を視点として	54
----------------------------------	----

一 『赤い鳥』の創刊とその試み	54
二 昔話の再話としての童話文体	56
三 『赤い鳥』の綴方	58
四 創作童話の展開	60
五 《童話》表現の限界と可能性	65

第三章 境界に立つ「子ども」——小川未明「赤い蠟燭と人魚」論	68
--------------------------------	----

一 伝承を描く伝承	68
二 「伝承」によって動く大人達	69
三 語り得ない「子ども」の人魚の心	73
四 重層的に取り込まれる伝承	76
五 「子どもの心」に対する畏怖を描く未明童話	81

第四章 小川未明「白刃に戯る火」論——「童話作家宣言」の文学史的意義をめぐって 87

- 一 未明の「童話作家宣言」 87
- 二 小川未明の社会主義小説／童話の特質 89
- 三 童話小説「白刃に戯る火」 91
- 四 初期プロレタリア文学における童話表現の広がり 95
- 五 プロレタリア文学における「リアリズム」 97

第五章 佐藤春夫 初期小説から童話への道程——初期作品における《家》を視点として—— 105

- 一 佐藤春夫の初期小説と童話 105
- 二 住宅改良運動と童話 106
- 三 《家》をめぐる怪奇 109
- 四 到達し得ない芸術を名指す言辭としての《童話》 111
- 五 《家》を描く童話 115
- 六 文壇作家の童話創作 119

第二部 大正期童話としての賢治童話

第一章 「よだかの星」論——近代自然科学と大正期童話の融合—— 123

- 一 賢治童話研究の傾向と課題 123
- 二 「よだかの星」の先行論と大正期童話 124
- 三 鈴木三重吉「家鴨の子」と「よだかの星」 126
- 四 《ヨタカ》をめぐる自然科学の言説 130
- 五 よだかの心理に内在する生物学的視点 132
- 六 実験としての賢治童話 135

第二章 「雪渡り」論——「狐の力」の復興—— 140

- 一 「狐」の幻燈会の美と怪 140
- 二 幻燈会の構成 141
- 三 教育装置としての幻燈会 144
- 四 狐／人間 秘められた対立 147

五	「調和」を生み出す語り	149
六	狐の霊力を負う《童話》	152

### 第三章 「まなづるとダアリヤ」論——小波お伽噺「菊の紋」との比較を中心に——

一	「菊の紋」と「まなづるとダアリヤ」	155
二	「菊の紋」と小波お伽噺	158
三	「まなづるとダアリヤ」〔第五形態〕	161
四	菊花会とダリア品評会	165
五	小波お伽噺から賢治童話へ	169

### 第四章 「マリヴロンと少女」論——「めくらぶだうと虹」からの改稿をめぐる——

一	「めくらぶだうと虹」から「マリヴロンと少女へ」	174
二	「めくらぶだうと虹」	176
三	「マリヴロンと少女」への改稿で追加されたモチーフ	179
四	マリヴロンとギルダ	181
五	「農民芸術概論綱要」と国柱会の国性芸術運動	185
六	童話における対話劇	190

### 第五章 「銀河鉄道の夜」の文学的達成——祭の祈りを〈描く〉ということ——

一	「成長読み」を超えて	196
二	童話の特質／「さびしさ」を象徴的に描く語り	197
三	銀河鉄道世界の設定／語りの比喻表現	199
四	祈りの言葉と祭の詞の融合	202
五	改稿の問題	207
六	おわりに	209

本文

五年以内に出版予定

## 参考文献一覧

### 序論

#### (一次資料)

- ・坪内逍遙『小説神髓』松月堂、明治一八・一九年
- ・山東京伝『骨董集』文化一一・一二年
- ・滝沢馬琴『燕石雜志』文化八年
- ・三省堂編輯所 編『日本百科大辞典』第七卷、大正五年
- ・落合直文『改修 言泉』第四卷、大倉書店、昭和二年
- ・大槻文彦 編『大言海』第三卷、富山房、昭和九年
- ・鈴木三重吉「通信」欄『赤い鳥』大正八年三月
- ・鈴木三重吉「童話選評」『赤い鳥』大正一一年一月
- ・「社告」『赤い鳥』大正八年一月
- ・特集「童話及童話劇についての感想」『早稲田文学』大正一〇年六月
- ・北原白秋「童心」『曼陀羅』大正六年一〇月
- ・北原白秋「童謡私鈔」『詩と音楽』大正一二年一月
- ・北原白秋『緑の触角』改造社、昭和四年
- ・小川未明「今後を童話作家に」『東京日日新聞』大正一五年五月一三日
- ・槇本楠郎『プロレタリア児童文学の諸問題』世界社、昭和五年
- ・高木敏雄『童話の研究』婦人文庫刊行会、大正五年
- ・松村武雄『童話及び児童の研究』培風館、大正一一年
- ・雑誌『童話研究』大正一一年七月・昭和一〇年一月
- ・蘆谷蘆村『童話学』文化書房、昭和六年
- ・菅忠道（柳瀬浩の筆名で発表）「明治以降に於ける児童文学研究の發達（一）」『児童芸術研究』昭和一一年二月
- ・「少年文学」の旗の下に！『少年文学』早大童話会、昭和二八年九月
- ・関英雄「児童文学者は何をなすべきか」『日本児童文学』昭和二一年九月
- ・中村光夫「風俗小説論」『文芸』昭和二五年二・五月
- ・菅忠道「現実と児童文学」『日本児童文学』昭和二二年八月
- ・中村光夫「大人と子供」『文学の回帰』筑摩書房、昭和三四年

・小田切秀雄「児童文学のために——ファンタジーの自由、その他」『日本児童文学』昭和二十二年八月

・高山毅「児童文学の危機」『新児童文化』昭和二十四年二月

・岡本良雄・前川康男・寺村輝夫 編『早大童話会35年のあゆみ』早大童話会、昭和三十五年

・鳥越信「少年小説への道」『朝日新聞』昭和二十八年二月一日

・塚原亮一「二者択一の考え方に誤りがある——早大童話会の主張についての私見」『日本児童文学』昭和二十九年四月

・いぬいとみこ・石井桃子ほか『子どもと文学』中央公論、昭和三十五年

・古田足日「童話から文学へ——新しい少年文学の課題」『早稲田大学新聞』昭和二十八年二月二日

・古田足日「近代童話の崩壊——その一例としての『あすもおかしいか』『小さい仲間』昭和二十九年九月

・古田足日「象徴童話への疑い(二)——「皇帝のあたらしいきもの」の構造」『少年文学』昭和二十九年六月二〇日

・古田足日「童心主義の諸問題」(鳥越信ほか 編『新選日本児童文学 ①大正編』小峰書店、昭和三四年)

・古田足日「さよなら未明——日本近代童話の本質」『現代児童文学論』くろしお出版、昭和三四年

## (二次資料)

・信時哲郎・外村彰ほか 編『近代童話と賢治』おうふう、平成二十六年

・小埜裕二 編『小川未明新収童話集』全六巻、日外アソシエーツ、平成二十六年

・宮沢清六・堀尾青史 編『宮沢賢治童話全集 新装版』全一二巻、岩崎書店、平成二十八年

・栗原敦・杉浦静 編『宮沢賢治コレクション』全一〇巻、筑摩書房、平成二八・三〇年

・『日本随筆大成 新装版 第一期第一五巻』吉川弘文館、平成六年

・『日本随筆大成 新装版 第二期第一九巻』吉川弘文館、平成一九年

・横須賀薫「童心主義と児童文学」(日本児童文学学会 編『研究 日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍、平成九年)

・河原和枝『子ども観の近代——『赤い鳥』と「童心」の理想』中央公論社、平成一〇年

・日本児童文学学会 編『児童文学事典』東京書籍、昭和六三年

- ・砂田弘「戦争責任はどう問われてきたか」『日本児童文学』平成七年八月
- ・宮崎芳彦『戦後児童文学史の未解決点』てらいんく、平成二二年
- ・長谷川潮「伝統批判が果たしたこと——「少年文学宣言」と『子どもと文学』『日本児童文学』昭和六一年五月

- ・渋谷清視「童話伝統批判のころと今日の児童文学」『日本児童文学』昭和四七年二月
- ・宮川健郎『現代児童文学の語るもの』日本放送出版協会、平成八年
- ・関口安義「日本児童文学の成立——思想史・社会史の視点から」（日本児童文学学会 編『研究 日本の児童文学』2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍、平成九年）
- ・宮川健郎『赤い鳥』創刊一〇〇年、記録と感想』『日本近代文学』令和元年五月
- ・柄谷行人「児童の発見」『群像』昭和五五年一月
- ・猪熊葉子「日本児童文学の特色」（日本児童文学学会 編『日本児童文学概論』東京書籍、昭和五一年）

- ・中村三春「未明童話の様式論——『赤い蠟燭と人魚』を読み直す」（日本児童文学学会 編『研究 日本の児童文学』3 日本児童文学史を問い直す』東京書籍、平成七年）
- ・大塚常樹『宮沢賢治 心象の記号論』朝文社、平成一一年
- ・押野武志『宮沢賢治の美学』翰林書房、平成一二年
- ・秋枝美保『宮沢賢治の文学と思想 透明な幽霊の複合体——開かれた自己——「孤立系」からの解放』朝文社、平成一六年
- ・大島丈志『宮沢賢治の農業と文学——苛酷な大地イーハトーブの中で』蒼丘書林、平成二五年
- ・安藤恭子『宮沢賢治〈力〉の構造』朝文社、平成八年
- ・井上寿彦『賢治、『赤い鳥』への挑戦』菁柿堂、平成一七年

## 第一部

### 第一章

#### （二次資料）

- ・巖谷小波『こがね丸』（叢書『少年文学』第一編、博文館、明治二四年）
- ・『国民之友』明治二四年一月二三日
- ・大町桂月「お伽祭」『文芸倶楽部』一四卷九号、明治四一年七月一日



- ・「巖谷小波氏 けさ逝く おとぎ話をのびさん」『東京朝日新聞』昭和八年九月六日夕刊
- ・堀紫山「少年文学第一編を読んで漣山人に寄す」『読売新聞』明治二四年二月一二日朝刊
- ・桜井鴎村「幼年文学と漣山人」『女学雑誌』四二七卷、明治二九年一〇月
- ・巖谷小波「おとぎ四十年【三】」『東京朝日新聞』昭和五年九月一六日朝刊
- ・巖谷小波「かち／＼山狸記念碑」『新御伽草子』博文館、明治二五年
- ・巖谷小波『猿蟹後日譚——一名 猿蟹弔合戦』（叢書『幼年文学』第二卷、博文館、明治二四年一二月）
- ・巖谷小波『小波身上噺』芙蓉閣、大正二年
- ・巖谷小波「少年文学身上話」『文章世界』明治三九年七月
- ・巖谷小波『日本昔噺 第一編 桃太郎』博文館、明治二七年
- ・巖谷小波「かちかち山狸記念碑」『日本新五大噺』三立社、明治四四年
- ・鳥居清経『むかし／＼さるとかに』安永七年
- ・山東京伝『小倉山時雨珍説』天明八年
- ・傀儡子、北尾重政『増補彌猴蟹合戦』寛政一〇年
- ・朋誠堂喜三二、恋川春町『親敵討腹鞭』安永六年
- ・芝全交、北尾政美『かち／＼山引返狸之忍田妻』寛政元年
- ・櫻川慈悲成、歌川豊国『昔料理狸吸物』寛政七年
- ・十返舎一九『閑思 獣境界』寛政九年
- ・恋川春町『辞闘戦新根』安永七年
- ・恋川春町『つとん 化物大江山』安永五年
- ・北尾政演（山東京伝）『御存商売物』天明二年
- ・巖谷小波『明治のお伽噺 上巻』小学館、昭和一九年
- ・巖谷小波「余が文章に裨益せし書籍」『文章世界』明治三九年八月
- ・巖谷小波「日の丸」『少年世界』一卷一号、明治二八年一月一日
- ・巖谷小波「大和玉椎」『少年世界』一卷三号、明治二八年二月一日
- ・巖谷小波「駄法螺」『少年世界』一卷四号、明治二八年二月一五日
- ・巖谷小波「媾和飯」『少年世界』一卷二二号、明治二八年六月一五日
- ・巖谷小波「玩具合戦」『少年世界』二卷二・三号、明治二九年一月一五日・二月一日
- ・巖谷小波「雷の臍」『少年世界』二卷一三号、明治二九年七月一日
- ・巖谷小波「ウマ鹿」『少年世界』二卷二二号、明治二九年一月一五日

- ・巖谷小波「土筆坊」『少年世界』二巻六号、明治二九年三月一五日
- ・巖谷小波「附録 お伽噺と時代」『世界お伽噺』第六〇編、博文館、明治三七年八月

## （二次資料）

- ・菅忠道『日本の児童文学 1 総論』大月書店、昭和三十一年
- ・関口安義「日本児童文学の成立——思想史・社会史の視点から」（日本児童文学学会 編『研究 日本の児童文学 2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍、平成九年）
- ・菅忠道「巖谷小波論 お伽作家小波の趣向」『新児童文化』昭和一七年五月
- ・森三郎「黄表紙と小波」『少国民文化』昭和一八年一月
- ・藤本芳則『〈小波お伽〉の輪郭——巖谷小波の児童文学』双文社、平成二五年
- ・桑原三郎・松井千恵 監修『巖谷小波「十亭叢書」の註解』ゆまに書房、平成六年
- ・畠山兆子「巖谷小波・初期作品にみる可能性——おもしろさを求めて」『梅花女子大学文学部紀要 児童文学篇』昭和五八年一二月
- ・内ヶ崎有里子『江戸期昔話絵本の研究と資料』三弥井書店、平成一一年
- ・加藤康子「『小本型近世子ども絵本』について——その明治期への影響」『学芸国語国文学』平成六年三月
- ・中村正明「昔話物黄表紙の概要と展開」『昔話伝説研究』平成一五年四月
- ・小池正胤ほか 編『江戸の戯作絵本 続巻一』社会思想社、昭和五九年
- ・佐藤至子『江戸の絵入小説——合巻の世界』ぺりかん社、平成一三年
- ・橋本四郎「近世における文語の位置」『京都女子大学紀要』昭和三十三年一二月
- ・小池正胤ほか 校注・解説『「むだ」と「うがち」の江戸絵本——黄表紙名作選』笠間書院、平成二三年
- ・巖谷栄二「明治のお伽噺——小波の少年文学」『国語と国文学』昭和二八年一〇月
- ・大阪国際児童文学館 編『日本児童文学大事典』大日本図書、平成五年
- ・上笙一郎 編『聞き書 日本児童出版美術史』太平出版社、昭和四九年
- ・神宮輝夫「童話と小説」（日本児童文学学会 編『日本児童文学概論』東京書籍、昭和五一年）
- ・横谷輝「童話の成立とその展開過程——日本の童話文学の歩み」（稲熊葉子ほか 編『講座 日本児童文学』④ 日本児童文学史の展開』明治書院、昭和四八年）

## 第二章

### (一次資料)

- ・鈴木三重吉「童話と童謡を創作する 最初の文学的運動」『赤い鳥』昭和十一年一〇月
- ・『赤い鳥』大正七年一〇月
- ・巖谷小波「窓の声」『世界お伽噺 第六一編 病魔降伏』博文館、明治三七年
- ・鈴木三重吉「おい／＼犬の子」『赤い鳥』大正一〇年一月
- ・「童話 ランプの持ち主」『少年倶楽部』大正四年一月
- ・谷崎潤一郎「敵討」『赤い鳥』大正七年八月
- ・佐藤春夫「蛙の王女」『赤い鳥』大正七年九月
- ・高浜虚子「一寸法師」『赤い鳥』大正七年一〇月
- ・丹野てい子「赤い鳥」と私」(与田準一ほか 編『赤い鳥代表作集③後期』小峰書店、昭和三三年)
- ・小島政二郎『眼中の人』三田文学出版部、昭和一七年
- ・「通信」欄『赤い鳥』大正八年三月
- ・植田草之助『少年倶楽部』大正四年一月
- ・鈴木三重吉「序(遺稿)」(木村不二男『綴方の書』刀江書院、昭和一三年)
- ・遠藤早泉『現今少年読物の研究と批判』開発社、大正一二年
- ・薦繁「支那人」『赤い鳥』大正一五年一月
- ・池田いね「支那人の手品」『赤い鳥』昭和二年七月
- ・西村ヒデ「支那手品」『赤い鳥』昭和六年二月
- ・『赤い鳥』大正八年三月
- ・「社告」『赤い鳥』大正八年一月
- ・下村千秋「手品使ひの描写」『赤い鳥』大正一五年三月
- ・下村千秋「蛇つかひ」『赤い鳥』昭和二年八月
- ・木内高音「支那人の子」『赤い鳥』昭和三年一二月
- ・坪田譲治「支那手品」『赤い鳥』昭和八年一月
- ・森三郎「鈴木三重吉研究(八) 先生と表現」『新文明』昭和三四年七月
- ・小野政方「湖水の女」を読み——鈴木三重吉氏に」『読売新聞』大正六年三月一日朝刊
- ・橋戸頑鐵「黒手組征伐」『少年倶楽部』大正五年二月
- ・豊島与志雄「櫛の宮」『赤い鳥』大正九年九月

- ・宮原晃一郎「夢の国」『赤い鳥』大正一二年四月

### （二次資料）

- ・中内敏夫『綴ると解くのと弁証法——「赤い鳥」綴方から「綴方読本」を経て』溪水社、平成二四年
- ・出雲俊江『『赤い鳥』綴方における鈴木三重吉の人間教育』『広島大学大学院教育学研究科紀要』平成二〇年一二月

- ・関英雄「児童文学の展開——その新たな出発」『新日本文学』昭和二十二年六月
- ・管忠道『日本の児童文学1 総論』大月書店、昭和三十一年
- ・鳥越信『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年
- ・古田足日「童心主義の諸問題」（鳥越信ほか 編『新選日本児童文学① 大正編』小峰書店、昭和三四年）

- ・佐藤宗子「再話の倫理と論理——フィリップ短編の受容」『日本児童文学』昭和五六年六月
- ・佐藤忠男「少年の理想主義について——『少年倶楽部』の再評価」『思想の科学』昭和三四年三月

- ・関英雄「童心主義」（日本児童文学学会 編『児童文学事典』東京書籍、昭和六三年）

## 第三章

### （二次資料）

- ・小川未明「赤い蠟燭と人魚」『東京朝日新聞』大正一〇年二月一六日・二〇日
- ・『東京朝日新聞』大正一〇年二月二〇日
- ・小川未明『赤い蠟燭と人魚』天佑社、大正一〇年
- ・鈴木三重吉『ぼッぽのお手帳』『赤い鳥』大正七年七月
- ・小川未明「私の一転機」『週刊朝日』六三卷二一号奉仕版、昭和三十三年五月
- ・「人魚塚（越後）」『北方文学』明治四五年六月
- ・五十嵐力「人魚塚」『趣味の伝説』二松堂書店、大正二年
- ・木村恒「人魚塚」『恋の伝説』四方堂、大正五年
- ・鈴木棠三「対馬の昔話（二）」『旅と伝説』昭和一四年九月
- ・鈴木棠三『川越地方昔話集』民間伝承の会、昭和一二年

・武田正 編『海老名ちやう昔話集 牛方と山姥』海老名正二、昭和四五年  
・菊岡沾涼『諸国里人談』寛保三年（『日本随筆大成 新装版』第二期二四卷、吉川弘文館、平成一九年）

・水島尺草『古今情話 怪談と奇談』信明堂書店、大正八年  
・喜舎場川石『琉球 八重山島に於ける人魚の話』『旅と伝説』昭和四年五月  
・宮城信男『石垣島より』『女性と経験』昭和三年三月  
・「子を負ふ人魚」『帝国新聞』明治四五年七月一五日夕刊  
・「海中に棲むといふ 伝説の人魚（上）」『福岡日日新聞』大正一四年七月八日  
・「人魚を捕獲す」『名古屋新聞』大正二年二月一日  
・「小坪に人魚現る」『北陸タイムス』大正四年七月一六日  
・「人魚の様な怪魚」『秋田魁新報』大正八年一月一二日  
・柳田国男「神に代りて来る」『教育問題研究』大正一三年十一月（『小さき者の声』ジープ社、昭和二五年）

・小川未明『未明感想小品集』創生堂、大正一五年  
・神谷養勇軒『新著聞集』寛延二年（『日本随筆大成 新装版』第二期五卷、吉川弘文館、平成一九年）

・柳田国男「昔話新釈」『旅と伝説』昭和五年四月  
・小川未明「黒い旗物語」『日本少年』大正四年四月  
・小川未明「娘と大きな鐘」『赤い鳥』大正一三年七月  
・古田足日「童心主義の諸問題」（鳥越信ほか 編『新選日本児童文学 ①大正編』小峰書店、昭和三四年）

・小川未明「子供は虐待に黙従す」『芸術の暗示と恐怖』春秋社、大正一三年

## （二次資料）

・高橋美代子『小川未明童話論』新評論、昭和五〇年  
・古田足日「近代童話の崩壊——その一例としての「あすもおかしいか」」『小さい仲間』昭和二九年九月三〇日  
・いぬいとみこ「小川未明」（いぬいとみこ、石井桃子ほか『子どもと文学』中央公論、昭和三五年）

・木村小夜「小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」『福井県立大学論集』平成一九年七月

- ・三浦正雄『赤い蠟燭と人魚』をめぐる考察『近代文学研究』平成二二年四月
- ・菅忠道『日本の児童文学1 総論』大月書店、昭和三十一年
- ・伊原洋次郎『未明文学と社会批判——「赤い蠟燭と人魚」を中心に』『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』平成二七年三月

・上笙一郎『未明童話の本質——「赤い蠟燭と人魚の研究」』勁草書房、昭和四一年

・堀畑真紀子「小川未明「赤い蠟燭と人魚」論——伝承説話の影響と創作的付加をめぐって」『国語国文学研究』平成一二二年二月

・『日本民俗宗教辞典』東京堂出版、平成一〇年

・本多真由美「小川未明の世界『赤い蠟燭と人魚』『活水日文』昭和六三年三月

・岡上鈴江『父小川未明』新評論、昭和四五年

・野村純一「近代文学と口承文芸——昔話に関して」『国学院雑誌』昭和四九年一月

・飯島吉晴「『福子』の民俗学的系譜」『天理大学人権問題研究室紀要』平成二三年三月

・生瀬克己 編『障害者と差別語——健常者への問いかけ』明石書店、昭和六一年

・大野智也・芝正夫『福子の伝承——民俗学と地域福祉の接点から』堺屋図書、昭和五八年

## 第四章

### (二次資料)

・小川未明「今後を童話作家に」『東京日日新聞』五月一三日

・「文芸盛衰記 新興文学の巻(十二) アナ系の残存者」『東京朝日新聞』昭和四年六月二

四日

・山川亮「小川未明論」『解放』大正一四年一月

・小川未明「事実と感想」『早稲田文学』大正一五年六月

・木佐木勝『木佐木日記 第二卷』現代史出版会、昭和五〇年

・小川未明「漂浪児」『新小説』明治三七年九月

・小川未明「魯鈍な猫」『読売新聞』明治四五年四月二四日・六月五日

・小川未明「戦争」『科学と文芸』大正七年一月

・小川未明「人と影」『解放』大正一一年一月

・小川未明「面白味のない社会」『我等』大正二一年一〇月

・『種蒔く人』大正一〇年一月

- ・『解放』大正一四年一月
- ・小川未明「冷淡であつた男」『解放』大正一二年四月
- ・小川未明「空中の芸当」『太陽』大正九年九月
- ・小川未明「砂糖より甘い煙草」『サンエス』大正九年一〇月
- ・小川未明「堤防を突破する浪」『中央公論』大正一四年六月
- ・小川未明「ある女の死」『解放』大正九年一〇月
- ・小川未明『おとぎばなし集 赤い船』京文堂、明治四三年
- ・小川未明「私の手記」『我等』大正一一年一月
- ・小川未明「黒い旗物語」『日本少年』大正四年四月
- ・小川未明「石段に鉄管」『文芸戦線』大正一三年一二月
- ・小川未明「星の世界から」『少年倶楽部』大正六年九月
- ・小川未明「酔っぱらひ星」『赤い鳥』大正九年一月
- ・小川未明「港に着いた黒んぼの話」『童話』大正一〇年六月
- ・小川未明「飴チョコの天使」『赤い鳥』大正一二年三月
- ・小川未明「負傷した線路と月」『赤い鳥』大正一四年一〇月
- ・小川未明「詩と美と想像」『読売新聞』明治四四年二月二五日朝刊
- ・小川未明「子供は虐待に黙従す」『芸術の暗示と恐怖』春秋社、大正一三年
- ・小川未明「童話に対する所見」『人間性のために』二松堂書店、大正一二年
- ・小川未明「馭者」『我等』大正一〇年一月
- ・小川未明「火を点ず」『種蒔く人』大正一〇年一月
- ・小川未明「踏切番の幻影」『中央公論』大正一三年一月
- ・小川未明「暴風と月の妖術」『中央公論』大正一五年一〇月
- ・小川未明「白刃に戯る火」『中央公論』大正一四年三月
- ・石井勇義『實際園芸叢書 第三卷 球根草花の作り方』誠文堂書店、大正一四年
- ・『種蒔く人』大正一〇年一月
- ・「紹介」『黒煙』大正八年四月
- ・童話特集号『黒煙』大正八年五月
- ・秋田雨雀「酋長と噴火」『種蒔く人』大正一〇年一月
- ・ワシーリー・エロシェンコ「虹の国」『我等』大正一〇年七月
- ・ワシーリー・エロシェンコ「理想花」『種蒔く人』大正一一年二月

- ・ワシーリー・エロシエンコ「世界平和の日（新童話）」『我等』大正一一年七月
- ・ワシーリー・エロシエンコ「墜ちる為めの塔」『解放』大正一二年五月
- ・長谷川如是閑「善良な悪魔の涙」『我等』大正一二年五月
- ・長谷川如是閑「猪の聖者」『我等』大正一二年六月
- ・村山槐多「鉄の童子」『我等』大正一〇年一月
- ・エロシエンコの「変り猫」『我等』大正一〇年三月
- ・金子洋文「人間派と蟻の会議」『種蒔く人』大正一一年二月
- ・武者小路実篤「ある都会」『我等』大正一〇年三月
- ・荒畑寒村「芸術か戦闘か」『近代思想』大正二年三月
- ・『種蒔く人』大正一一年四月
- ・小川未明「建設の前に新人生観へ（上）」『東京朝日新聞』大正一四年九月二五日
- ・小川未明「文学上の態度、描写、主観」『描写の心得』春陽堂、大正七年
- ・山内房吉「四月の文芸を観る（六）」『東京朝日新聞』大正一五年四月一〇日朝刊
- ・小川未明「池についての話し」『文芸行動』大正一五年四月
- ・新居格「師走月評（三）」『万朝報』大正一四年二月五日
- ・宇賀生「創作月評 三月のものの読後感（二）」『やまと新聞』大正一四年三月四日
- ・岡田三郎・浅原六朗「<sup>二</sup>創作 不同調 二人合評」『不同調』大正一五年三月
- ・相田隆太郎「創作を主として（四）」『読売新聞』大正一四年三月一四日朝刊
- ・徳田秋声「十月の作品」『時事新報』大正一五年一〇月一〇日
- ・青野季吉「『調べた』芸術」『文芸戦線』大正一四年七月
- ・中西伊之助「表現主義の危険と新現実主義の要求」『文芸戦線』大正一四年九月
- ・武藤直治「唯物論とリアリズム」『文芸戦線』大正一五年一月
- ・青野季吉「『ジャングル』を中心に——「調べた芸術」再論」『文芸戦線』大正一五年一月
- ・蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」『戦旗』昭和三年五月
- ・「座談会 日本の児童文学のあけぼの（小川未明、楠山正雄、坪田譲治、浜田広介、司会・古谷鋼武）」『新児童文化』昭和二六年六月
- ・岩野泡鳴・上司小剣・小川未明『現代日本文学全集 第二三巻』改造社、昭和五年
- ・稲野省三「鎌」『戦旗』昭和三年七月
- ・楨本楠郎「文化村を襲った子供」『戦旗』昭和三年二月



（二次資料）

- ・山室静「小川未明論」『現代日本文学全集 七〇』筑摩書房、昭和三二年
- ・本山恭子「小説家としての小川未明論——『童話作家宣言』を中心に」『立教大学日本文学』昭和三九年一月

・山田稔「小川未明における思想と美学——『魯鈍な猫』について」『文学』昭和三六年一〇月

・船木枳郎『小川未明童話研究』宝文館、昭和二九年

・紅野敏郎「小川未明」『日本現代文学全集 四二』講談社、昭和四一年

・秋山清「アナキスト・小川未明」『文学』昭和三六年一〇月

・飛鳥井雅道『日本プロレタリア文学史論』八木書店、昭和五七年

・栗原幸夫『増補新版 プロレタリア文学とその時代』インパクト出版会、平成一六年

・瀬沼茂樹「小説家としての小川未明」『文学』昭和三六年一〇月

・杉浦明平「小川未明論」『文学』昭和三六年一〇月

・菅忠道「日本の児童文学と小川未明」『文学』昭和三六年一〇月

・日本近代文学館 編『日本近代文学大事典』講談社、昭和五二年

・安藤宏 編『編年体大正文学全集 第一四巻』ゆまに書房、平成一五年

・平野謙「プロレタリア文学」『日本文学講座 第六巻 近代の文学 後期』河出書房、昭和二五年

・平野謙「昭和」『現代日本文学全集 別巻第一巻 現代日本文学史』筑摩書房、昭和三四年

第五章

（一次資料）

- ・佐藤春夫「西班牙犬の家」『星座』大正六年一月
- ・佐藤春夫「美しい町」『改造』大正八年八・九・一二月
- ・佐藤春夫「月光異聞」『太陽』大正一一年四月
- ・佐藤春夫「実さんの胡弓」『赤い鳥』大正一二年七月
- ・佐藤春夫「人生の樂事」『文芸春秋』昭和三年二・六月
- ・高木敏雄『童話の研究』婦人文庫刊行会、大正五年
- ・植村龍世「都市居住者の悲哀」『住宅』大正七年九月

- ・橋口信助「個性の要求する住宅」『住宅』大正十一年六月
- ・橋口信助「住宅は芸術品である」『住宅』大正十一年一月
- ・西村伊作『楽しい住家』警醒社、大正八年
- ・原田治郎「住み心地よき家」『住宅』大正八年三月
- ・佐々木喜善「家の伝説」『住宅』大正八年九月
- ・佐々木喜善「童話に現れたる「部屋」の起源 昔からある奥州地方の童話」『住宅』大正九年九月

- ・「明快なる小供室」『住宅』大正九年一〇月
- ・秋保安治「楽しい小供室」『住宅』大正九年一〇月
- ・片岡尚賢「二種の小供室」『住宅』大正九年一〇月
- ・須藤まがね「童話 ポチのお家」『住宅』大正七年十一月
- ・佐藤春夫「処女作のころ」『光』昭和二三年六月
- ・佐藤春夫「指紋」『中央公論』大正七年七月
- ・佐藤春夫『田園の憂鬱』新潮社、大正八年
- ・芥川龍之介・菊池寛「九月の文壇を合評す（七）」『東京日日新聞』大正八年九月一二日
- ・佐藤春夫『蝗の大旅行』改造社、大正十五年
- ・佐藤春夫「魔のもの」『新小説』大正十一年四月
- ・佐藤春夫「蝗の大旅行」『童話』大正一〇年九月
- ・須藤鐘一「蛙鳴く里より——（六月文壇の印象）」『読売新聞』大正八年六月四日
- ・谷崎潤一郎「序」『病める薔薇』天佑社、大正七年

## （二次資料）

- ・桜井啓一「『美しき町』の夢想家たち——「美しき町」考」『文芸と批評』平成十二年五月
- ・旦部辰徳「大正期文学における私秘的空間への〈眼差し〉二相——稲垣足穂と佐藤春夫、二人の〈家〉小説の比較を中心に」『あいだ／生成』平成二十六年三月
- ・川本三郎『大正幻影』新潮社、平成二年
- ・武田信明『〈個室〉と〈まなざし〉——菊富士ホテルから見る「大正」空間』講談社、平成七年

・海老原由香「佐藤春夫「西班牙犬の家」論——夢〈見る〉心地」『日本近代文学』平成一〇年一〇月

・生方智子「探偵小説」以前——佐藤春夫『指紋』における〈謎解き〉の枠組み』『日本近代文学』平成一八年五月

・井上貴翔「技術が生み出すもの——佐藤春夫「指紋」論」『日本文学』平成二五年六月  
・河野龍也「佐藤春夫「五月」から『田園の憂鬱』へ——〈祈祷〉を描くという戦略」『国語と国文学』平成一八年八月

・横谷輝『増補版 児童文学の思想と方法』啓隆閣、昭和四八年

## 第二部

全集 『新校本 宮沢賢治全集』全一六巻、筑摩書房、平成八・二二年

## 第一章

### (一次資料)

- ・『赤い鳥』大正一四年一月
- ・槇木楠郎『プロレタリア児童文学の諸問題』世界社、昭和五年
- ・佐藤春夫「大熊中熊小熊」『赤い鳥』大正七年一二月
- ・鈴木三重吉「家鴨の子」『赤い鳥』大正一〇年七月
- ・アンデルセン『Andersen's Fairy Tales』此星堂書店、大正一四年
- ・小山内薫「俵の蜜柑」『赤い鳥』大正七年七月
- ・鈴木三重吉「魔法の魚」『赤い鳥』大正七年九・一〇月
- ・野上豊一郎「ボビノが王様になった話」『赤い鳥』大正七年一月
- ・室生犀星「寂しき魚」『赤い鳥』大正九年一二月
- ・宮島資夫「生笹」『赤い鳥』大正一五年二月
- ・田中茂穂『普通動物図譜』成美堂書店、大正四年
- ・丘浅次郎『進化論講話』開成館、明治三七年
- ・内田清之助 編『日本動物圖鑑』北隆館、昭和二年
- ・飯島魁 編『動物学提要』大日本図書、大正七年
- ・森下福三郎『詳解動物学 中等講座』忠誠堂、大正一五年
- ・宮沢賢治「花鳥図譜・七月・」『女性岩手』昭和八年七月

- ・内田亨「うどんげ」『赤い鳥』大正一一年四月
- ・内田亨「ヒドラ」『赤い鳥』大正一一年六月
- ・内田亨「章魚と烏賊」『赤い鳥』大正一一年七月

## （二次資料）

- ・宮沢清六「兄賢治の生涯」（筑摩書房 昭和四二版全集別巻『宮沢賢治研究』草野心平編、昭和四四年）
- ・堀尾青史『年譜 宮沢賢治伝』図書新聞社、昭和四一年
- ・恩田逸夫「宮沢賢治の童話文学制作の基底」『跡見学園国語科紀要』昭和二九年一二月
- ・井上寿彦『宮沢賢治『赤い鳥』への挑戦』葦柿堂、平成一七年
- ・谷川徹三「ある手紙 宮沢賢治といふ人」『東京朝日新聞』昭和一〇年二月一二・一四日
- ・小沢俊郎「よだかの星」『別冊国文学 宮沢賢治必携』昭和五五年五月
- ・平尾隆弘『宮沢賢治』国文社、昭和五三年
- ・中野新治「賢治童話はなぜ「暗い」のか——「よだかの星」管見」『日本文学研究』昭和六一年十一月
- ・呉善華「宮沢賢治『よだかの星』論」『湘南文学』平成五年三月
- ・北野昭彦「宮沢賢治「よだかの星」論——不条理への怒りと究竟の幸福への祈り」『立命館文学』平成七年七月
- ・村瀬学「越えられない状況を越える時——「よだかの星」の巧みな構成から」『宮沢賢治』平成元年十一月
- ・天沢退治郎『宮沢賢治の彼方へ』思潮社、昭和四三年
- ・清水真砂子「よだかの星」論『日本児童文学』昭和五一年二月
- ・伊藤眞一郎「宮沢賢治「よだかの星」試論（上）／（下）」『安田女子大学紀要』昭和六〇年一〇月、平成元年二月
- ・押野武志『童貞としての宮沢賢治』筑摩書房、平成一五年
- ・西田良子「アンデルセンと宮沢賢治」（日本児童文学学会 編『アンデルセン研究』小峰書店、昭和四四年）
- ・大塚常樹『宮沢賢治 心象の宇宙論』朝文社、平成五年
- ・原子朗 編『定本 宮沢賢治語彙辞典』東京書籍、平成二五年
- ・赤田秀子・杉浦嘉雄・中谷俊雄『賢治鳥類学』新曜社、平成一〇年

- ・呉善華『よだかの星』——生と死の狭間』『解釈と鑑賞』平成八年十一月

## 第二章

### (一次資料)

- ・宮沢賢治『愛国婦人』大正一〇年一月・大正一一年一月
- ・第一期国定修身教科書『尋常小学修身書』明治三十六年
- ・『地方通俗教育施設状況』文部省普通学務局、大正五年
- ・寺田寅彦『映画時代』『思想』昭和五年九月
- ・「本邦皮革の調査」『皮革世界』明治四四年八月
- ・渡瀬庄三郎「日本には野獣人工養殖が極めて必要」『毛皮年報』小林毛皮貿易、大正一二年
- ・江口千代「銀の御殿」『赤い鳥』大正八年七月
- ・豊島与志雄「櫳の宮」『赤い鳥』大正九年九月
- ・豊島与志雄「白狐の話」『赤い鳥』大正九年四月

### (二次資料)

- ・小沢俊郎「狐考」『四次元』昭和二七年二月
- ・続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社、昭和四四年
- ・恩田逸夫「宮澤賢治——「雪渡り」と「注文の多い料理店」」『宮沢賢治論3』東京書籍、昭和五六年
- ・西田良子「賢治童話における「雪渡り」の位置」『宮沢賢治研究 Annual』平成二一年三月
- ・中地文「宮沢賢治「雪渡り」考——法華文学としての童話の試み」(プラット・アブラハム・ジョージ、小松和彦 編『宮沢賢治の深層』法蔵館、平成二四年)
- ・寺田透「宮沢賢治の童話の世界」『文学』昭和三九年三月
- ・さねとうあきら『雪渡り』への懷疑『日本児童文学』平成八年一月
- ・別役実『イーハトーボゆき軽便鉄道』リポート、平成二年
- ・大島丈志「雪渡り」論——『赤い鳥』童話・童謡運動を背景として『宮沢賢治の農業と文学——苛酷な大地イーハトーヴの中で』蒼丘書林、平成二五年
- ・國分雄治「宮沢賢治「雪渡り」の一考察——異空間(子どもの王国)と現実世界をつなぐもの」『盛岡大学日本文学会研究会報告』平成二二年三月

- ・福田アジオほか 編『日本民俗大辞典』吉川弘文館、平成十一年
- ・大蔵隆雄「通俗教育期の時代的性格と構造的特質」『日本近代教育百年史 第七巻』国立教育研究所編、昭和四十九年

・大久保遼「明治期の幻燈会における知覚統御の技法——教育幻燈会と日清戦争幻燈会の空間と観客」『映像学』平成二十二年一月

・青山貴子「明治・大正期の映像メディアにおける娯楽と教育―写し絵・幻灯・活動写真」『生涯学習・社会教育学研究』平成二十二年三月

・関敬吾『日本昔話大成 第七巻 本格昔話六』角川書店、昭和五十四年

・谷本誠剛「『雪渡り』と物語りの歌謡的成立」『folia』平成一十五年三月

・千葉瑞夫『日本わらべ歌全集2下 岩手のわらべ歌』柳原書店、昭和六〇年

### 第三章

#### (一次資料)

- ・「附録 小波先生」『童話三十六人集』東京宝文館、昭和六年
- ・巖谷小波「菊の紋」『少年世界』一卷二一号、明治二十八年一月
- ・巖谷小波『小波お伽百話』博文館、明治四十四年
- ・巖谷小波『小波お伽全集』一二巻、小波お伽全集刊行会、昭和五年一月
- ・大町桂月「お伽祭」『文芸倶楽部』一四巻九号、明治四十一年七月
- ・巖谷小波『日本お伽噺』第一編、博文館、明治二十九年一〇月
- ・岩本熊吉『最新ダーリヤ栽培法』大日本園芸組合園芸書出版会、大正一三年
- ・「一、二道六県の菊花品評会」『東京日日新聞（岩手版）』昭和二年一〇月二七日
- ・『東京朝日新聞』明治二十四年一月二五日
- ・芳賀矢一「菊花と国民性」『弘道』大正二年一月
- ・『東京朝日新聞』大正二年九月二六日
- ・『岩手毎日新聞』昭和二年八月九日
- ・『岩手毎日新聞』昭和三年八月六日夕刊
- ・『同窓会報』盛岡高農同窓会発行、昭和三年一月
- ・『岩手毎日新聞』昭和三年八月二一日夕刊
- ・「各軍隊事務所 花巻川口町の」『岩手毎日新聞』昭和三年一〇月五日

- ・『岩手毎日新聞』昭和五年九月一〇日夕刊
- ・『岩手毎日新聞』昭和五年九月一二日夕刊
- ・『岩手日報』昭和五年九月二六日夕刊
- ・『岩手日報』昭和二年七月二五日
- ・『小波日記』マイクロフィルム、明治大学和泉図書館蔵
- ・『花巻温泉ニュース』昭和四年八月、昭和五年四・七月
- ・木村小舟 編『小波先生 還暦記念』昭和五年
- ・鈴木三重吉「赤い鳥」の標榜語『赤い鳥』大正七年七月
- ・小川未明「公園の花と毒蛾」『東京朝日新聞』大正一一年六月二六日・七月一〇日

#### （二次資料）

- ・堀尾青史『年譜 宮沢賢治伝』図書新聞社、昭和四一年
- ・続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』桜楓社、昭和四四年
- ・鳥越信 編『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房、平成一三年
- ・滑川道夫・管忠道 編『近代日本の児童文化』新評論、昭和四七年
- ・宇野浩二『遠方の思出』昭和書房、昭和一六年
- ・稲田浩二・小沢俊夫 編『日本昔話通観』五巻、同朋舎出版、昭和五七年
- ・遠藤祐「ふたつの〈物語〉——「まなづるとダアリヤ」の昼と夜と」『学苑』平成一八年  
十一月

### 第四章

#### （一次資料）

- ・宮沢賢治『注文の多い料理店』東京光原社、大正一三年
- ・『Modern English Readers』第五巻、三省堂、明治四四年
- ・瀬川秀雄『新編西洋歴史』富山房、明治四四年

・スタンリー『スタンレー探検実記 一名 闇黒亜弗利加』上下巻、矢部新作訳、博文館、明治三十九年

・田中智学「芸術に奮起せる予の覚悟」『国性文芸会案内』大正一二年発行

・宮沢賢治「花巻農学校精神歌」『天業民報』大正一二年七月三日

・宮沢賢治「角礫行進曲」『天業民報』大正一二年七月二十九日

・宮沢賢治「黎明行進曲（花巻農学校精神歌）」『天業民報』大正一二年八月七日

・宮沢賢治「青い槍の葉（挿秧歌）」『天業民報』大正一二年八月一六日

・「国難救護 正法宣揚 同志結束義金 報告」『天業民報』大正一二年一月二七日

・「国性文芸会 成立披露会」『天業民報』大正一二年二月二七日

・河野桐谷「日蓮主義の与へたる芸術の根本義（四）」『天業民報』昭和三年二月一九日

・武智一一「生活と芸術」『天業民報』昭和四年八月八日

・田中智学「芸術の聖用」『大日本』昭和七年一月一八日

・河野桐谷「文士と立候補」『天業民報』昭和五年二月一三日

・武田杵太郎「国性芸術の本質と其特色」『天業民報』昭和四年十二月一日

・石原莞爾『世界最終戦論』立命館出版部、昭和一五年

・「田中先生と石原参謀」『大日本』昭和七年二月二七日

## （二次資料）

・『別冊国文学 宮沢賢治必携』学燈社、昭和五五年

・原子朗『定本 宮沢賢治語彙辞典』筑摩書房、平成二五年

・佐藤泰正「宮沢賢治——その改稿の問いかけもの『マリヴロンと少女』を中心に」『解釈と鑑賞』平成一三年八月

・恩田逸夫「宮沢賢治の文学における「まこと」の意義——作品「めくらぶだうと虹」を中心として観た四次元芸術の解明」『跡見学園紀要』昭和三〇年一〇月

・吉本隆明『悲劇の解読』筑摩書房、昭和五四年

・吉江久弥「賢治の初期童話とタゴール——『めくらぶだうと虹』を中心に」『京都語文』平成九年一〇月

・深見美希「宮沢賢治『マリヴロンと少女』論——少女像とアフリカをめぐる内村鑑三の影響」『国文目白』平成二二年二月

・川辺陽介「支配者としてのマリヴロン——宮沢賢治『マリヴロンと少女』をめぐる『繡』



平成二一年三月

・濱田有紀子「宮沢賢治「めくらぶだうと虹」——めくらぶだうの愚かさ」『新樹』平成三年七月

・石川教張「宮沢賢治における「まこと」の美と信仰——『めくらぶだうと虹』を中心として」『東京立正女子短期大学紀要』昭和六〇年二月

・浜野卓也「〈テキスト評釈〉マリヴロンと少女」『國文学』昭和六一年五月

・天沢退二郎『宮沢賢治』論』筑摩書房、昭和五一年

・大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』法蔵館、平成一三年

・上田哲『宮沢賢治 その理想世界への道程』明治書院、昭和六〇年

## 第五章

### （二次資料）

・豊島与志雄「檜の宮」『赤い鳥』大正九年九月

・『探検世界』秋季臨時増刊号「月世界」、明治四〇年一〇月

・増本河南『冒険  
怪話 空中旅行』福岡書店、明治四二年

・黒岩涙香『新説 破天荒』扶桑堂、明治四三年

・永代静雄『天体旅行』自学奨励会、大正七年

・野村胡堂『太郎の旅 月世界のたんけん』子どもの科学社、大正一五年

### （二次資料）

・西田良子『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」を読む』創元社、平成一五年

・見田宗介『宮沢賢治——存在の祭りの中へ』岩波書店、昭和五九年

・村瀬学『銀河鉄道の夜』とは何か』大和書房、平成元年

・中村三春「“争異”するディスクリール——『銀河鉄道の夜』のレトリック」『國文学』平成六年四月

・松澤和宏『銀河鉄道の夜』の結末（第八三葉）を読む——ミクロ・ジェネティクからマクロ・ジェネティクへ』『日本近代文学』平成一五年一〇月

・入沢康夫・天沢退二郎『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』青土社、昭和五一年

・鈴木健司『宮沢賢治という現象——読みと受容への試論』蒼丘書林、平成一四年

- ・吉本隆明『宮沢賢治』筑摩書房、平成元年
- ・高橋秀雄・門屋光昭 編『祭礼行事・岩手県』桜楓社、平成四年
- ・中野新治「死の夢・夢の死——「銀河鉄道の夜」ノート」『日本文学研究』平成二年一月
- ・押野武志「宮沢賢治「銀河鉄道の夜」のふたつの〈終わり〉——ザネリのために」『解釈と鑑賞』平成二年九月

## 論文の内容の要旨

大正七年、鈴木三重吉によって児童雑誌『赤い鳥』が創刊されると、類似の児童雑誌が続々と出版されるだけでなく、『中央公論』など総合雑誌や婦人雑誌、新聞も童話を掲載するようになった。こうした所謂大正期童話運動の担い手となったのが文壇作家であったことは、この運動が教育の問題というより、むしろ文学の領域の現象であったことを示している。日本の近代文学は、坪内逍遙の『小説神髓』をはじめとして写実主義を信奉し、非現実の空想を語る昔話や説話は正當な「文学」からは退けられてきた。寓話や昔話の系譜は児童文学に引き継がれたが、近代児童文学を先導した明治期の巖谷小波、大正期の鈴木三重吉、小川未明などは文壇の作家たちであり、彼らは小説によつては表現し得ないものを、文壇小説から切り離された《童話》の領域で実現しようとしたと考えられる。

本研究は、近代小説から排除された《童話》の表現形式としての特質とその可能性を探る試みである。

まず序論では、これまで《童話》がどのように定義づけられ、議論されてきたかを概観した。大正期から戦前には、文壇での《童話》創作と、昔話としての《童話》を分析する神話学等の《童話》研究とが、十分な交流を持たなかったがために、昔話として《童話》が持っていた特質が創作童話においてどのような効果を發揮しているかは論じられてこなかった。戦後の「童話伝統批判」のなかで古田足日らは童話の「象徴性」を批判したが、彼らの指摘は図らずも、昔話としての《童話》の特質として戦前に分析されていたことと重なっている。そこで本研究では、大正期の童話において、昔話としての《童話》が持っていた特質や象徴性がどのように生かされているかを論の中核に置くこととした。

鈴木三重吉は『赤い鳥』の創刊にあたり、それまでの子どもの読み物、明治期のお伽噺を強く批判したが、昔話の翻案を基本とする『赤い鳥』の童話は、明治のお伽噺の強い影響下にありつつその刷新を図ったものと見ることが出来る。そこで第一部では巖谷小波のお伽噺に遡って大正期童話の性質を明らかにすることを試みた。また小川未明、佐藤春夫の実際の童話作品を分析することで、大正期童話運動の広がり进行を明らかにした。また第二部では大正期童話のなかで今日でも最もよく読まれている作家である、宮沢賢治の童話に目を向け、その作品に《童話》の表現形式がどのように生かされているかを分析することで、《童話》の表現としての効果を解明している。以下にその概略を示す。

まず第一部第一章では、巖谷小波のお伽噺について、草双紙の表現手法がどのように受け

継がれているかを、挿絵と本文との関係性、会話文の描き方、擬人化の手法などに着目して分析を行った。これにより、小波お伽噺は活版印刷にシフトするにあたって、草双紙が持っていた挿絵と本文との密接な関わりを新たな形で模索し、日常の事物が多様な擬人化によって躍動する作風を確立したことを示した。

第二章では、『赤い鳥』の生み出した新たな《童話》文体の特質について、小波お伽噺との比較や、子どもの綴り方作品と童話作品との相互交流の調査を通じて考察した。『赤い鳥』は、慣用的表現や洒落に基づく小波お伽噺の文体を排除し、平易な語彙や単文構造で記述することで個人を超越した普遍的な「伝承の語り」を創出している。これにより、日常の事物や言語表現に密着した小波お伽噺の空想が失われた反面、普遍性、象徴性を獲得し、昔話が持っていた場面構成や語りの特質が一層鮮明に示されるようになったことを論じている。

第三章では、文壇で活躍した大正期の童話作家として最大の存在である小川未明の代表作『赤い蠟燭と人魚』について、第二章で指摘した、『童話』の、昔話の語り手を装う語り、子どもの心情を語る語りがどのような形で機能しているかを分析した。本作の語り手は、物語の中間部では子どもの人魚の心情に寄り添って語りつつも、結末では子どもの人魚の心情を語ることをやめて昔話のように町に起こる悲劇を語っていく。こうした語りの切り替えによって、本作が子どもの心を捉えきれないものとして描き出そうとしていることを明らかにしている。

第四章では、初期のプロレタリア文学運動を先導した小川未明の「童話作家宣言」（大正一五年五月）の意義を探りつつ、童話がプロレタリア文学のなかで果たし得た役割を考察した。未明は初期から社会的弱者を小説に繰り返し描いてきたが、大正後期には、「白刃に戯る火」をはじめとする童話の手法を取り入れた小説によって、資本主義社会を批判的に描き出した。また初期のプロレタリア文学には、童話の手法を用いた作品群が存在しており、社会を構造的に捉えて批判するため童話の表現形式が有効であると認識されたことを示した。第五章では、さらに文壇の大家であり、大正期童話運動にも携わった作家である佐藤春夫を取り上げる。春夫は自ら家の設計に取り組んだが、大正期はまさに住宅改良運動が興った時期であり、春夫の初期小説はこうした同時代の家をめぐる言説を取り込む形で、家を異世界や芸術創作の象徴として描き、それを《童話》のイメージと結びつけて語っている。さらに、春夫は初期小説で用いた家のモチーフを童話作品では物語の主軸に据えて描いている。このように文壇作家にとって《童話》は小説においても重要な芸術概念として機能し、それが実際の童話作品の創作に接続していることを明らかにした。

第二部では、こうした大正期童話の中で今日でも最も評価の高い賢治童話を分析した。賢治作品は独自性が強調されるあまり、賢治もまた『赤い鳥』の創刊とともに、その影響下で《童話》を書いた作家であることは十分に検討されてこなかった。だが賢治童話は大正期童話の表現形式を独自の形で用いて、その可能性を押し広げた作家であると考えられる。

第一章では賢治の初期の童話「よだかの星」について、『赤い鳥』童話と、文体や語りのあり方において比較し、物語設定に織り込まれている生物学的事項を調査した。これによって本作が『赤い鳥』童話の枠組みと語りに、自然科学の言説を取り込んで構成されていることがわかった。また本作において自然科学的に種や生命体として生物を捉える視線が、宗教的な思惟と重なっていることを明らかにした。

第二章では、賢治が中央の雑誌に発表した数少ない童話として「雪渡り」を扱った。狐の幻燈会が当時の通俗教育幻燈会を模したものであること、また日露戦争等を通じて毛皮の入手のために狐が狩猟、養殖の対象となったことなど同時代の事象と照らし合わせることで、狐たちの真意を探った。さらに本作においては同時代の童話にも多く用いられている異界訪問譚の枠組みが、狐たちの企みを覆い隠し、狐たちの魔力を読者に及ぼす仕掛けとなっていることに触れ、本作が語りのレベルでも伝承世界を再興していることを示した。

第三章では、童話「まなづるとダアリヤ」の改稿を分析し、小波お伽噺「菊の紋」との比較を行うことで、賢治童話が大正期童話の語りを生かしながらも、大正期童話が切り落とした小波お伽噺の表現を取り込んでいることを分析した。また晩年の賢治も参加していた菊花品評会やダリアの品評会の社会的意義が本作の改稿と関わっていることを調査し、互いに認識し得ない世界層の重なりを描く改稿がなされていることを明らかにした。

第四章では、賢治が晩年まで改稿を行った童話「マリヴロンと少女」を取り上げた。初期形「めくらぶだうと虹」では、擬人化された事物の形態と主題とが高度にかみ合っていたのであるが、「マリヴロンと少女」への改稿によって人間の対話劇に変更され、宗教的な思惟が個人の生の葛藤とすれ違う様相が描き出されている。またこの改稿の背景には、「農民芸術概論綱要」や国柱会の国性芸術運動における言説と重なる側面があることが明らかにした。

第五章では、賢治の代表作であり、賢治が死の直前まで改稿を続けていた「銀河鉄道の夜」を、最終形態である第四次稿を中心に、改稿も含めて扱った。本作は大正期童話の語りや場面の構成を利用してジョバンニの「さびしさ」を作品の中心に据えている。また本作においては、銀河鉄道世界を描く比喻表現や、鉄道内の人々の間で反復される祈りの言葉が、祭の囃し詞の変形としてあることを論じた。これらにより本作は、個人の生は宗教的な命題によ

っても救い難いことを示しながらも、文学の表現のなかにこそ、刹那的な救済の瞬間を生み出しているのであり、これこそが賢治童話の達成であることを明らかにした。

以上の考察を通して、近代の《童話》が、読みの方向性や作品イメージを強固に定めていく語りや構成を持っていること、その一方で作品の細部に、複雑な背景や同時代の文化的事象を織り込むことで、物語像を重層化し、その重なりのある様によって作品の問題を提示し得る表現形式であることを考察している。そしてこの重層性を文学的な実験の場として利用し、その表現の多様性を示してみせたのが賢治童話であったことを明らかにした。